・深度45.91～48.28mの破砕部は，破砕部範囲内に複数のせん断面が認められる。最新活動面の認定フローの見直しによりCT画像を使用してコアの内部構造をより詳細に観察し，せん断面周辺の構造を三次元的に確認した。
・コア観察の結果，明瞭なせん断面を伴う破砕部区間として，以下を抽出した。
①:深度45.91～45.94m，②:深度46.30～46.45m，③:深度47.64～47.75m
・また，CT画像を観察した結果，破砕構造が見られない箇所が破砕部範囲に認められたため，破砕部の範囲の見直しを行った。

ボーリング柱状図

●45.91～48.28m：破砕部
45.91～45.94m：粘土質礫状部（Hb）
上端52°，下端35°でともに直線的でシャープに連続。径1～2mmの石英粒と径5mmで粘土化した花崗斑岩の岩片を多く含む。軟質。明赤灰色を呈する。幅30mm。
45.94～46.41m：粘土混じり岩片状部（Hj）
上端35°，下端15°でともに直線的でシャープに連続。径10mm前後の岩片間を幅1～2mmの軟質な白色粘土脈が網目状に分布する。浅黄橙色を呈する。
46.41～46.45m：砂混じり粘土状部（Hc-2）
上端15°で直線的にシャープに，下端20°でやや波打ちながら連続。径1～3mmと少量の径5mmで粘土化した花崗斑岩の岩片を含む。やや硬質。浅黄橙色を呈する。幅25～30mm。
46.45～47.64m：粘土混じり岩片状部（Hj）
上端20°，下端20°でともにやや波打ちながら連続。径5～20mmの岩組織がほぼ消滅した花崗斑岩の岩片と岩片間を縫うように網状に分布する幅1～2mmの白色軟質粘土脈及び46.80mでは幅8mm，57°の灰黄褐色粘土などからなる。明黄褐色を呈する。46.77～46.79mのほぼ水平に分布する暗褐色の細粒部については，コア掘削時のコアの供回りによるものである。
47.64～47.65m：砂混じり粘土状部（Hc-2）
上端20°でやや波打ちながら，下端10°で直線的にシャープに連続。径1～2mmの石英粒と少量の粘土化した径5mmの花崗斑岩の岩片を含む。やや軟質。明赤灰色を呈する。幅10～15mm。
47.65～48.18m：粘土混じり岩片状部（Hj）
上端10°，下端34°でともに直線的でシャープに連続。一部で岩組織が残留，一部で消滅した径5～20mmの花崗斑岩の岩片と岩片間を網状に分布する幅1～2mmの白色軟質粘土脈からなる。明赤灰～明褐灰色を呈する。
48.18～48.26m：粘土質礫状部（Hb）
上端34°，下端68°でともに直線的でシャープに連続。径1～2mmの石英粒と下端部に硬質岩片を残すが，これ以外は粘土化した径5mm前後の花崗斑岩の岩片からなる。やや硬質。灰白～明黄褐色を呈する。幅40～70mm。
48.26～48.28m：砂混じり粘土状部（Hc-2）
上端68°，下端68°でともに直線的にシャープに連続。径1～2mmの石英粒を少量含む。やや硬質。明黄褐色を呈する。幅6～8mm。下端の灰白色の細粒部は不連続である。

コア写真

凡例
← → 破砕部範囲※
※:写真上は白色で記載

第7.4.4.248図（1）　破砕部性状　H24-D1-1　深度45.91～48.28m（破砕部の検討）

＜CT画像観察結果＞
・深度45.00～45.91m，45.94～46.00mは破砕部相当箇所なし。
・深度45.91～45.94m破砕部。

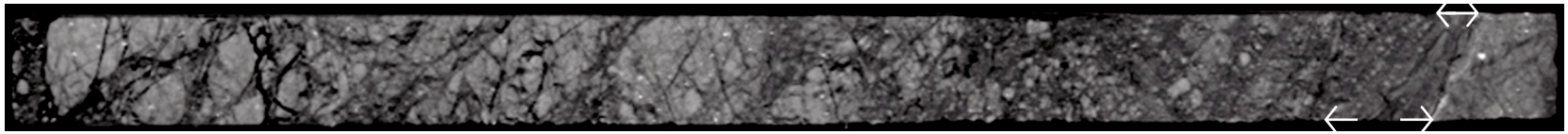
コア写真

45

46

CT画像

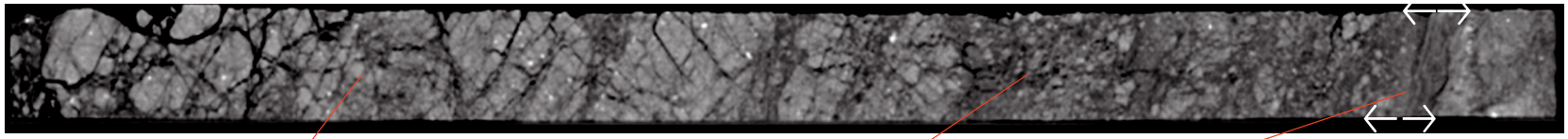
45



46

CT画像（側面）

45



46

凡例
破砕部範囲※
※：写真上は白色で記載

概ね均質で，周辺より密度が高く，亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。
規則的な節理が認められる。

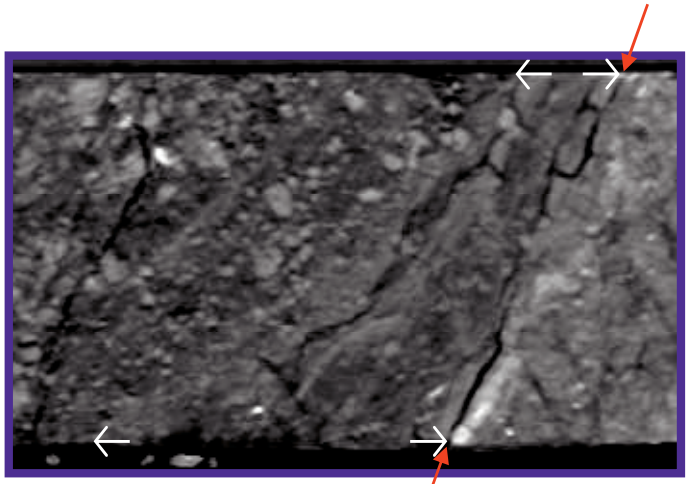
亜円礫の配列や縞状のせん断構造・変形構造が認められる。

角礫化して，基質の密度が低いが，亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。
規則的な節理が一部残存している。

第7.4.4.248図（2）　破砕部性状　H24-D1-1　深度45.00～46.00m（CT画像による評価（1/3））

コア写真

CT画像



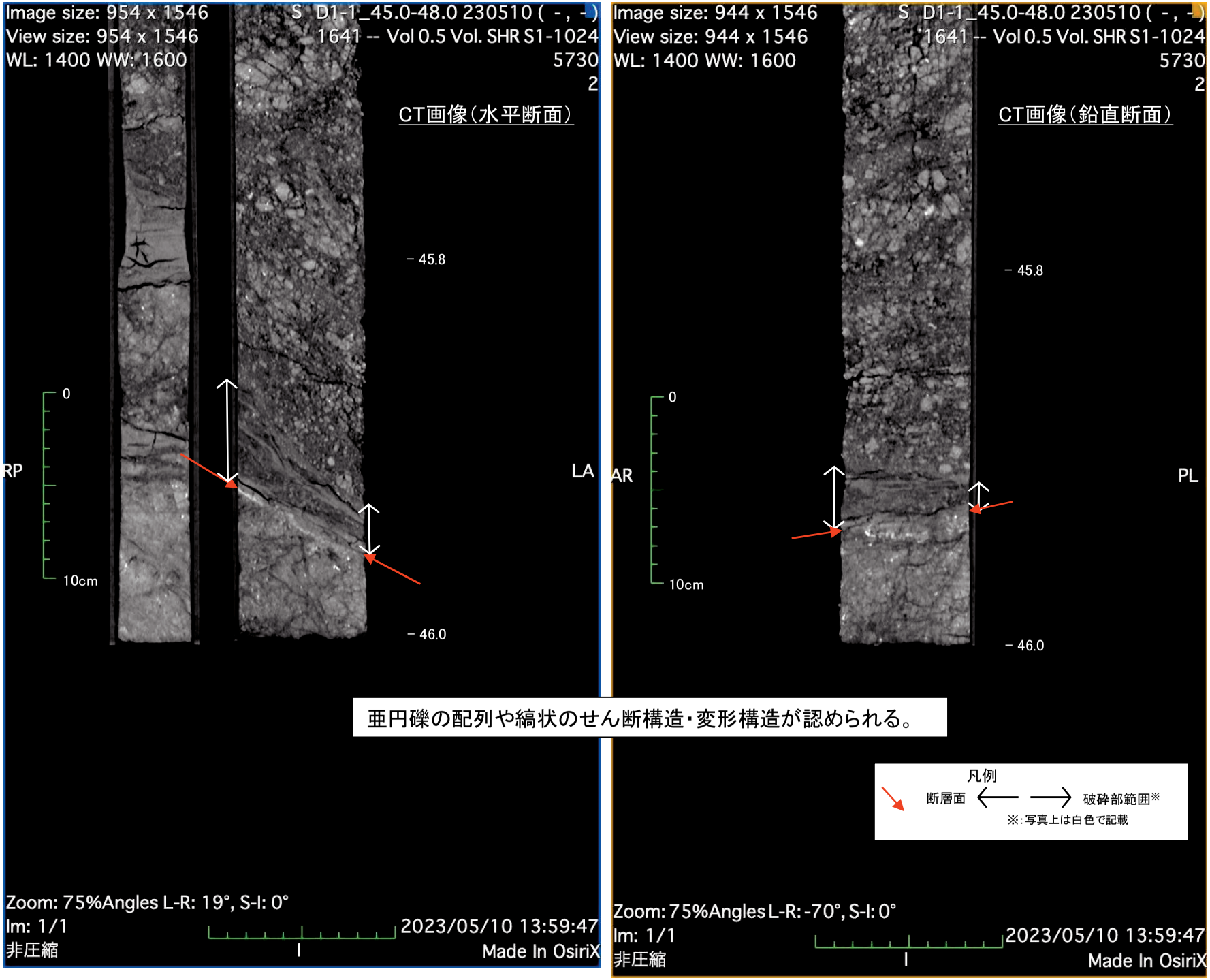
※このCT画像は，青枠内の区間を
解像度を上げて撮影した

0　　5 cm

亜円礫の配列や縞状のせん断構造・変形構造が認められる。

凡例
破砕部範囲※
断層面
※:写真上は白色で記載

第7.4.4.248図（3）　破砕部性状　H24-D1-1　深度45.00～46.00m（CT画像による評価（2/3））

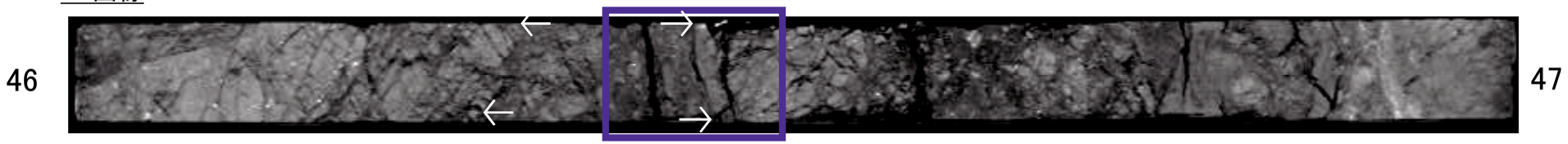


第7.4.4.248図（4）　破砕部性状　H24-D1-1　深度45.00～46.00m（CT画像による評価（3/3））

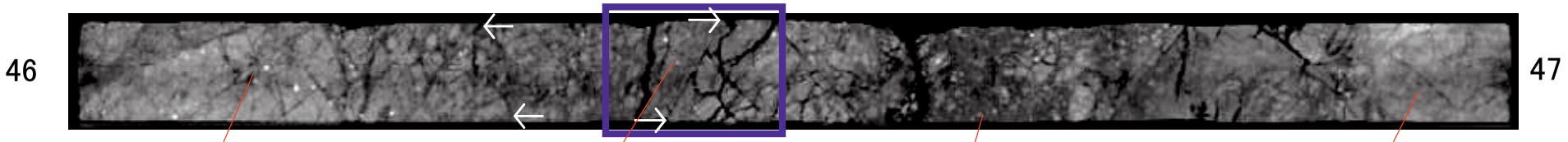
＜CT画像観察結果＞
・深度46.30～46.45m破砕部，その周辺は破砕部相当箇所なし。
・深度46.77～46.79mの水平方向の暗褐色の細粒部は掘削時のコアの供回りによるものである。

コア写真

CT画像



CT画像（側面）



均質で，規則正しい節理が認められ，亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。

深度46.30m～46.45m
亜円礫の配列や縞状のせん断構造・変形構造が認められる。

礫状を呈するが，全体に均質で，亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。

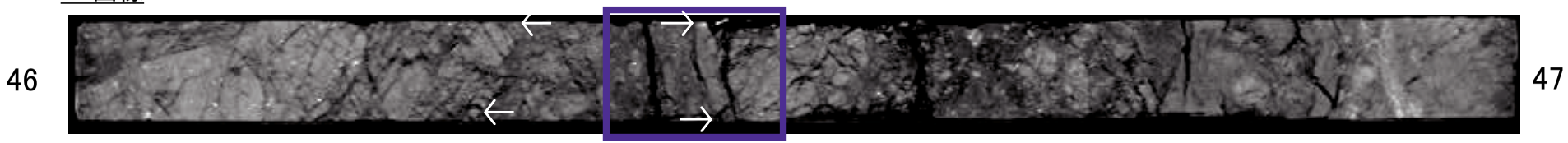
均質で，規則正しい節理が認められ，亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。

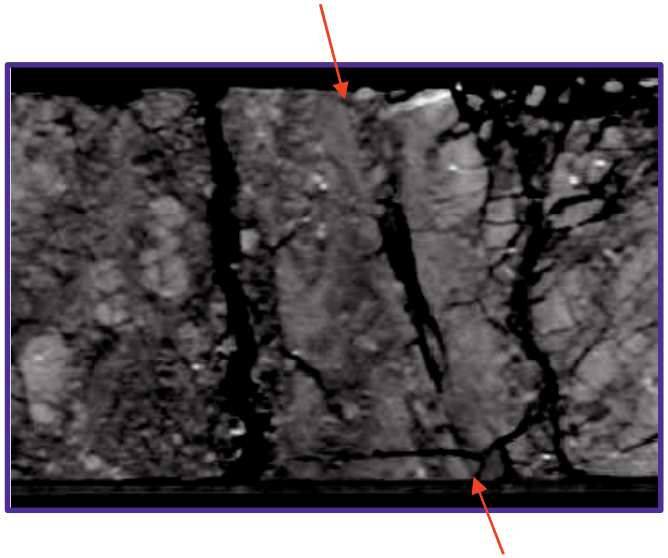
凡例
← → 破砕部範囲※
※：写真上は白色で記載

第7.4.4.248図（5）　破砕部性状　H24-D1-1　深度46.00～47.00m（CT画像による評価（1/4））

コア写真

CT画像

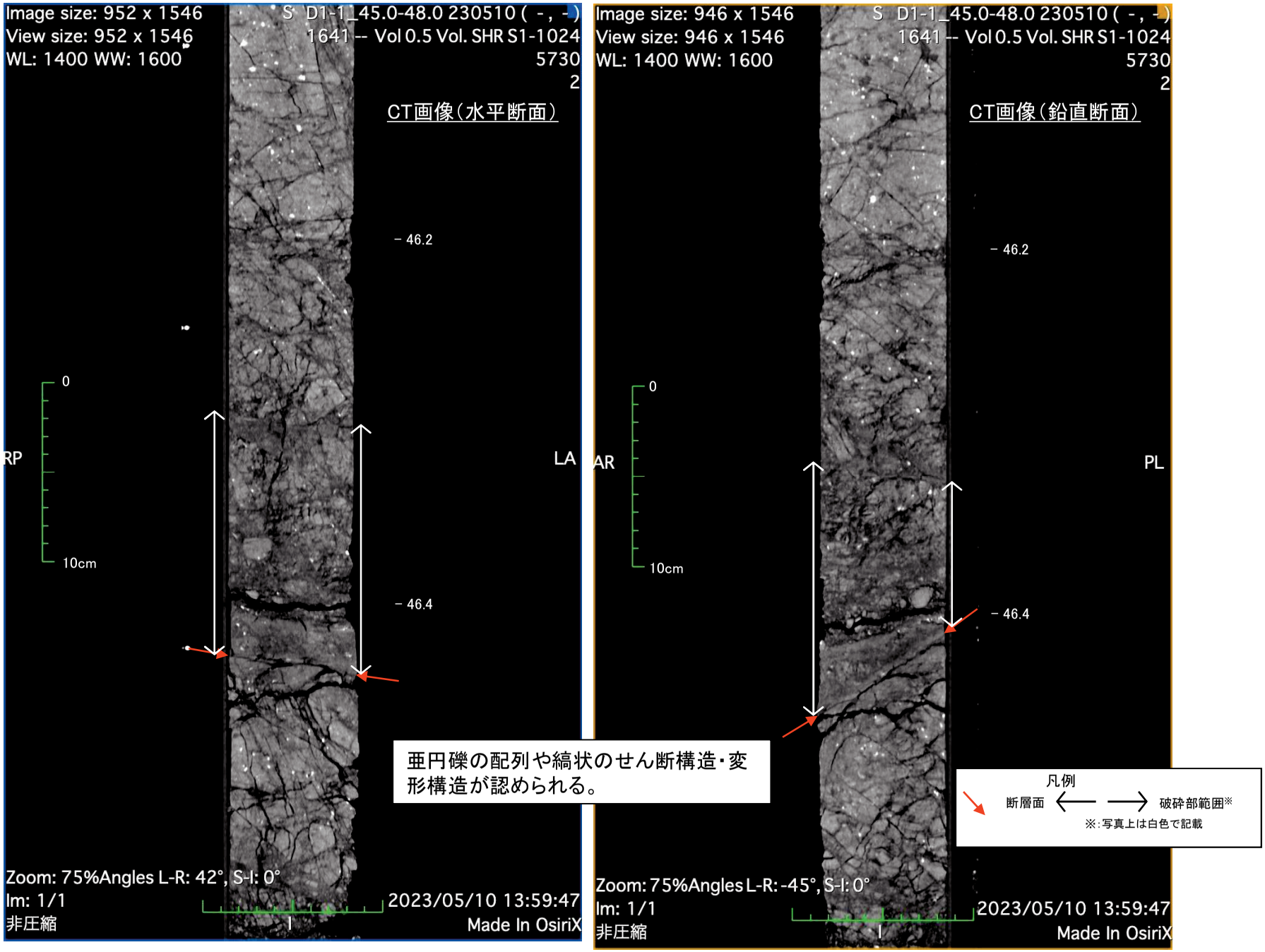




深度46.30～46.45m
亜円礫の配列や縞状のせん断構造・変形構造が認められる。

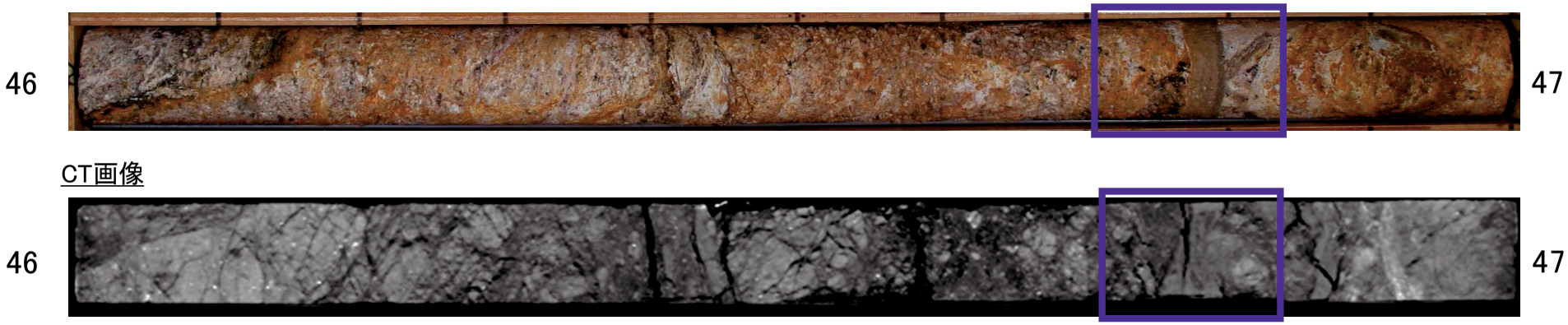
凡例
破砕部範囲※
断層面
※:写真上は白色で記載

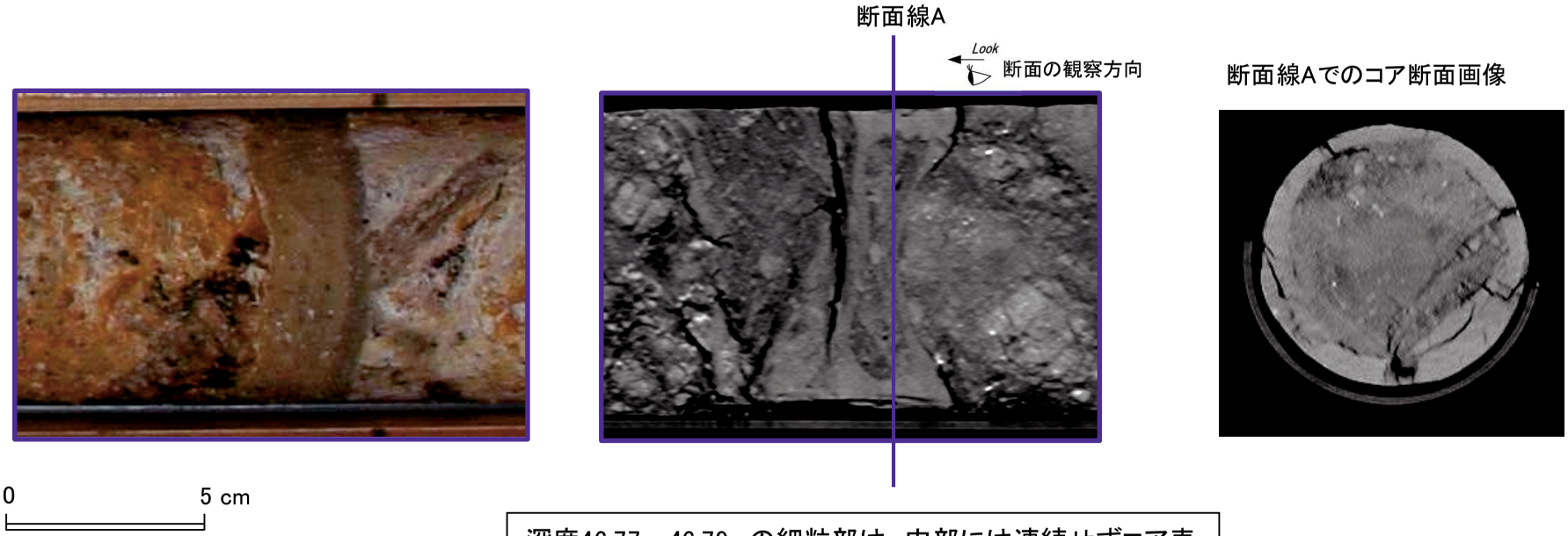
第7.4.4.248図（6）　破砕部性状　H24-D1-1　深度46.00～47.00m（CT画像による評価（2/4））



第7.4.4.248図（7）　破砕部性状　H24-D1-1　深度46.00～47.00m（CT画像による評価（3/4））

コア写真



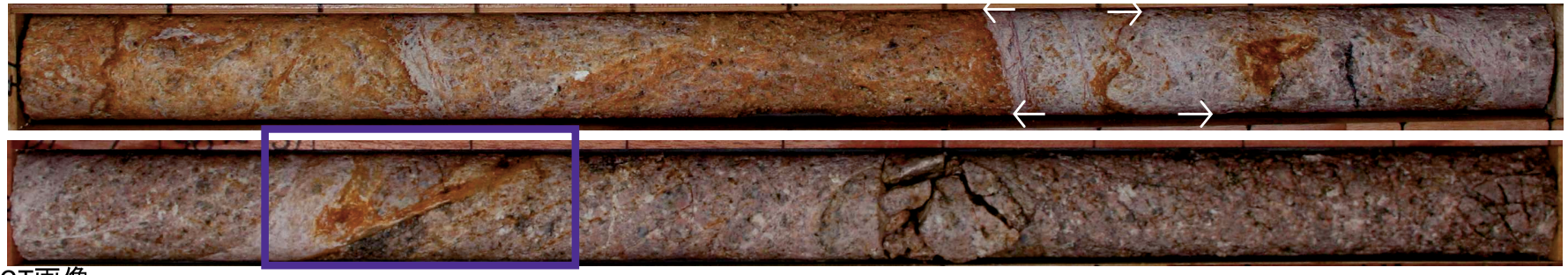


深度46.77～46.79mの細粒部は，内部には連続せずコア表面にのみ分布している。
細粒部は掘削時のコアの供回りによる付着物である。

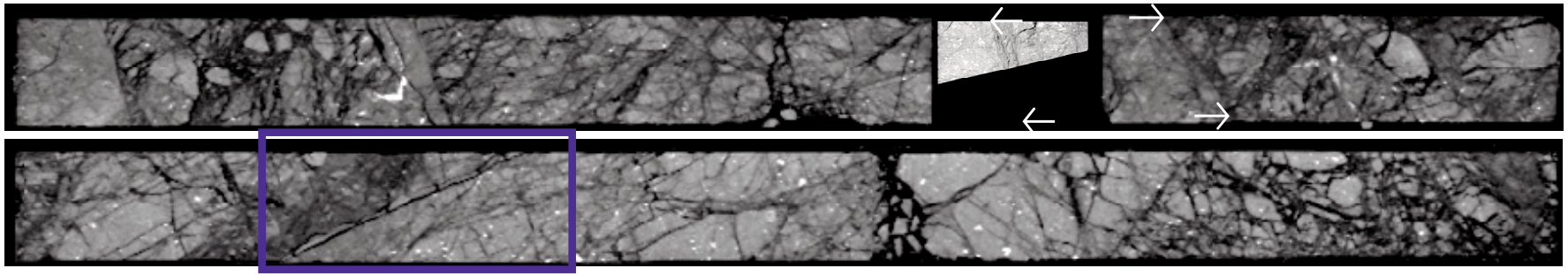
第7.4.4.248図（8）　破砕部性状　H24-D1-1　深度46.00～47.00m（CT画像による評価（4/4））

＜CT画像観察結果＞
・深度47.64～47.75m破砕部，その周辺は破砕部相当箇所なし。
・深度48.00～49.00m間に破砕部相当箇所なし。

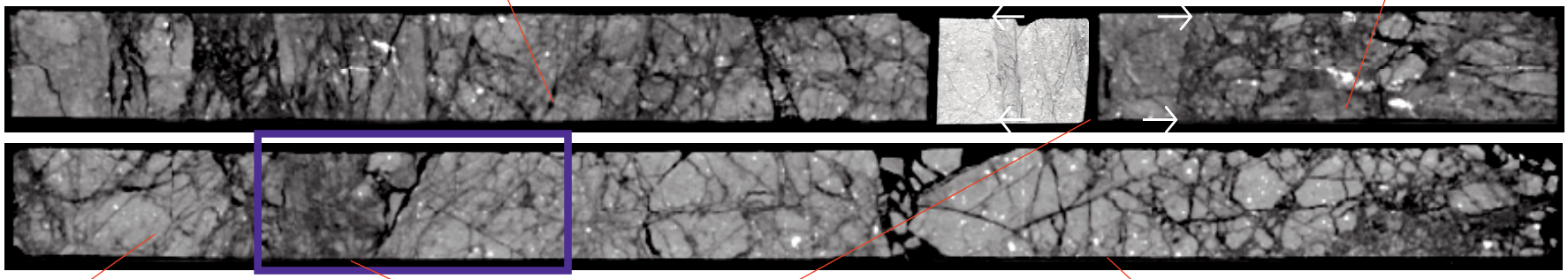
コア写真



CT画像



CT画像（側面）



角礫状を呈し，基質の密度が低い部分には規則的な節理が認められる。亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。

研磨片作成範囲

角礫状を呈し，基質の密度が低い部分には規則的な節理が認められる。亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。

均質で，角礫状を呈する部分には規則正しい節理が認められる。亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。

深度48.20m～48.28m間は，細粒化した低密度帯が認められるが，境界面に凹凸が認められ，直線性に乏しい。

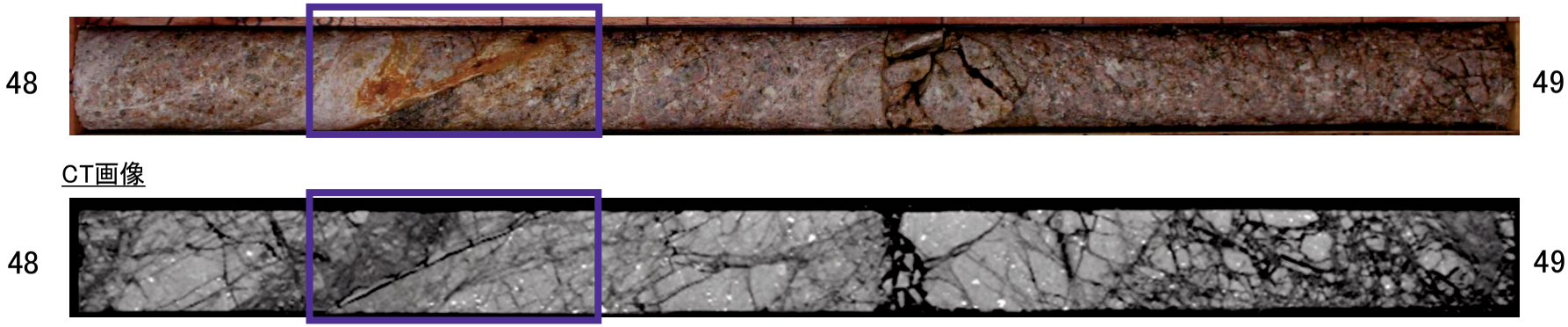
深度47.64～47.75m間は，亜円礫の配列や縞状のせん断構造・変形構造が認められる。

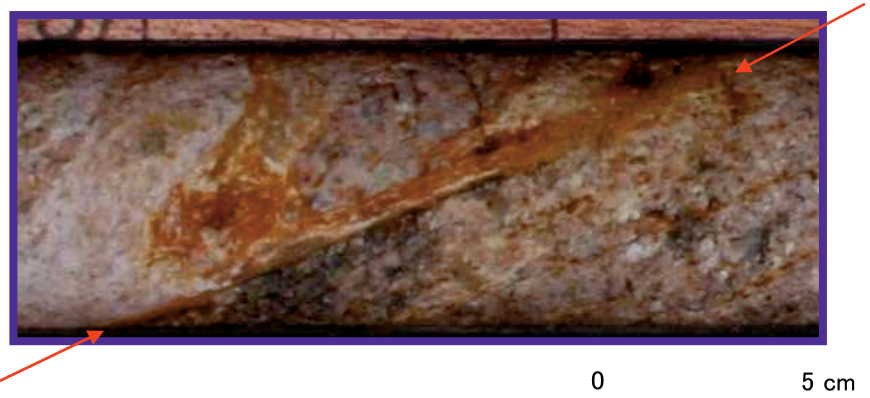
均質で，角礫状を呈する部分には規則正しい節理が認められる。亜円礫の配列や縞状のせん断面・破砕構造は認められない。

凡例
← → 破砕部範囲※
※:写真上は白色で記載

第7.4.4.248図（9）　破砕部性状　H24-D1-1　深度47.00～49.00m（CT画像による評価）

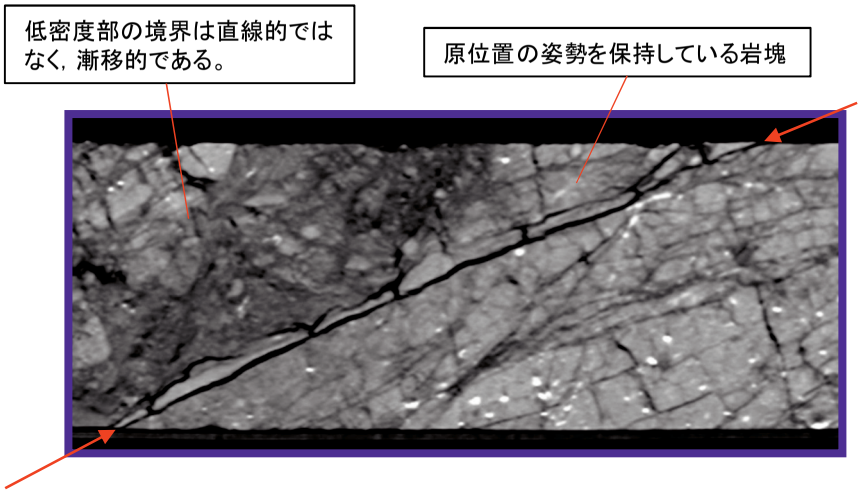
コア写真





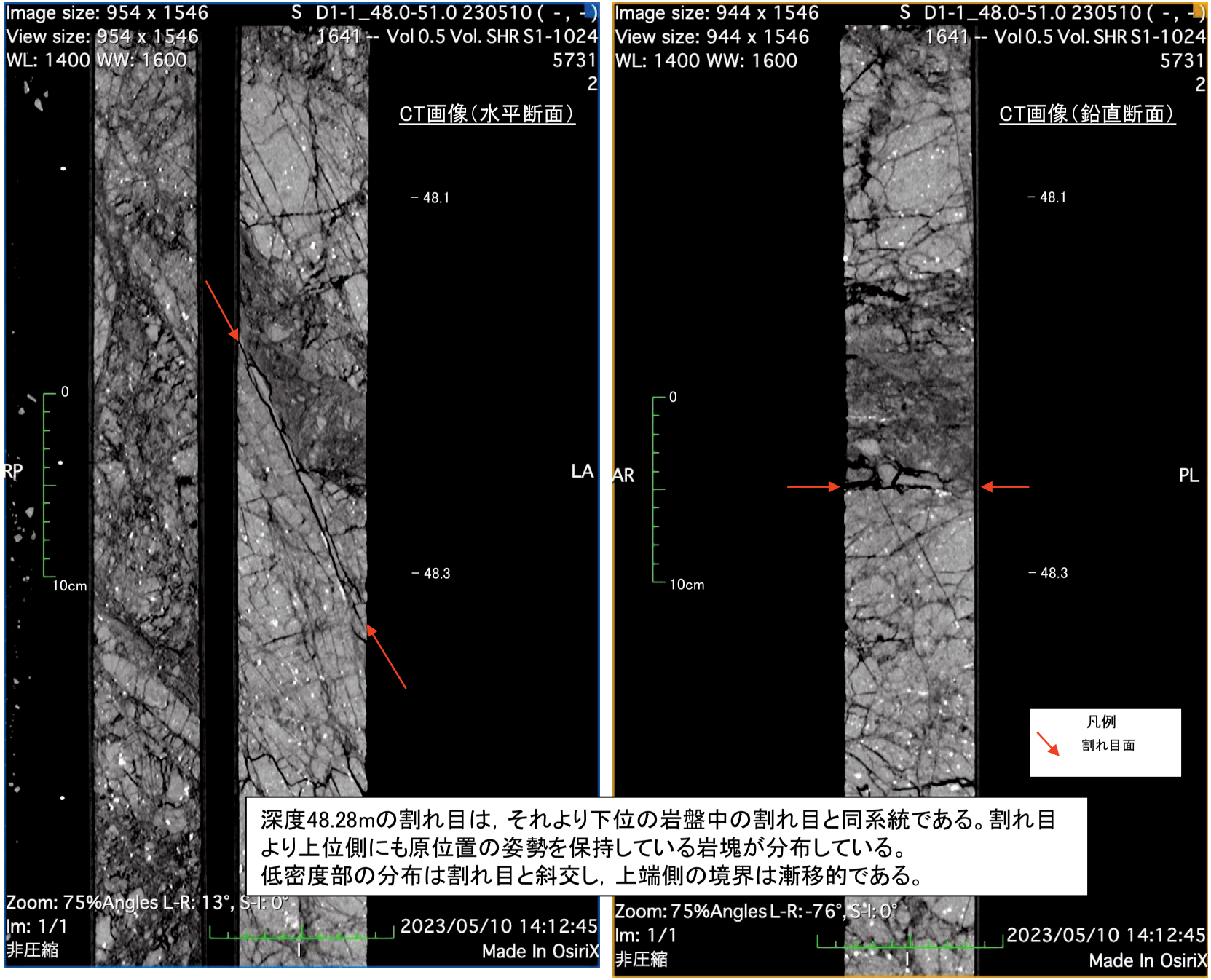
凡例

割れ目箇所



深度48.28mの割れ目は，それより下位の岩盤中の割れ目と同系統である。割れ目より上位側にも原位置の姿勢を保持している岩塊が分布している。
低密度部の分布は割れ目と斜交し，上端側の境界は直線的ではなく，漸移的である。

第7.4.4.248図（10）　破砕部性状　H24-D1-1　深度48.00～49.00m（CT画像による評価（1/2））



深度48.28mの割れ目は，それより下位の岩盤中の割れ目と同系統である。割れ目より上位側にも原位置の姿勢を保持している岩塊が分布している。
低密度部の分布は割れ目と斜交し，上端側の境界は漸移的である。

第7.4.4.248図（11）　破砕部性状　H24-D1-1　深度48.00～49.00m（CT画像による評価（2/2））

・深度45.91～45.94mの「粘土質礫状」と記載の箇所については，軟質であるが，含まれる細粒部は網目状に分布し，連続性及び直線性に乏しい。原岩組織が認められる岩片を主体とし，基質は細粒化した岩片からなる組織が認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。

ボーリング柱状図

45.91～45.94m：粘土質礫状部（Hb）
上端52°，下端35°でともに直線的でシャープに連続。径1～2mmの石英粒と径5mmで粘土化した花崗斑岩の岩片を多く含む。軟質。明赤灰色を呈する。幅30mm。

コア写真

青枠部拡大

第7.4.4.248図（12）　破砕部性状　H24-D1-1　深度45.91～45.94m（肉眼観察による断層岩区分）